

# 瑞医

世界に羽ばたくMEDIPOINT  
2009 VOL.10

contents

極 研究&教育  
Current topics in research and education

人 時の人  
People in the news

楽 学生生活  
Campus life

技 最新医療の紹介  
Latest developments on the medical front

和 お知らせ  
Information

## 医・薬・看護連携チームラーニング ～地域参加型学習の導入～

平成20年度に開始した医・薬・看護連携早期体験学習は、今年からグループ研究のテーマに、北設楽郡豊根村富山地区と三河湾の篠島の調査研究を加えました。このカリキュラムでは3学部の1学年約240名が24の学部混成チームで活動しますが、その内2チームがこれらの地域を担当しています。カリキュラムの目標は、入学後早期から医療人としての自覚と使命感を持ち、自ら課題を見つけ解決する課題探求型の学習姿勢と、医療人に必要なチームワーク能力を習得することです。地域の研究では、地元の人たちとのふれあいから地域のニーズを発見し、「学生なればこそできる」課題の解決を通じて、医療人としての姿勢や実践力を習得して欲しいと考えています。

富山地区担当の学生グループは、8月17日から2日間の現地調査を行い、連携教育担当教員も同時に現地を視察しました(写真)。富山集落は、昭和30年に佐久間ダムによって水没した村落が山麓に移転したものです。昭和35年に人口654人の本州最小の村となり、平成17年に豊根村と合併しましたが、現在の集落人口は137名です。地域に産業は殆どなく、収入源は公務員と災害に対する工事です。診療所に医師が来るのは週2日で、今回、豊根地区から来た医師に学生がインタビューし、僻地医療の非常に現実的な話を聴きました(内容は後日報告します)。一方、自然は豊かで人々の強い結びつきがあり、

学生達が行ったバーベキューでは集落の全小中学生(10名)をはじめ多くの人達と打ち解け、翌日の家庭や学校の訪問調査もスムーズに進みました。集落には離村者の空き家が多く、山村暮らしに憧れる人からの問い合わせが多いようですが、離村しても村への愛着から家を手放せず、未だ外からの移住者はないようです。医療だけでなく、建築や文化、経済面からも大学が関わることで地域の持続可能な発展に繋がる可能性を感じました。

篠島担当の学生グループも精力的に研究活動を行っています。知多厚生病院の協力を得て6月14日と8月20日に現地調査を行いました。名古屋から電車と高速船による移動で思ったほど時間がかからず、あまり「離島」という印象はないとのことですが、島の現状や行事とともに、診療所の調査を行い、患者さんからのインタビュー、海南病院の2年目研修医による島の人たちへの講演活動などが印象的だったとのこと。

地域を学習の場とする「地域基盤型学習」は多くの大学で行われていますが、学生が一時的にやってきて去っていくだけに終わるケースが多いようです。本学ではこれを一歩進め、「地域参加型学習」を目指したいと考えています。その理念は、「地域への参加」による学習と、「地域の参加」による医療人育成です。このプログラムは、このたび「医療系学部連携チームによる地域参加型学習」として、文部科学省の平成



21年度GP大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラムに採択されました。来年度は今年の活動の継続発展と共に、本プログラムを都市部にも広げたいと考えています。

最後に、富山地区の調査には豊根村役場および富山支所、診療所および村民の皆様から、また篠島の調査には区長様をはじめ島民の皆様、また知多厚生病院宮本忠壽院長から、ご理解と多大なご支援を頂いております。この場をお借りして御礼申し上げます。

医・薬・看護連携教育ディレクタ(早野順一郎、浅井清文、木村和哲、飯塚成志、鈴木 匡、前田 徹、明石恵子)

### “瑞医の由来”

「瑞医(ずいい)」という言葉は、瑞穂で育った医師が心の支えとなる名市大、「瑞」にはめでたいことという意味があるので新しい門出の広報誌にと考えました。新しく発足した同窓会と一体となって歩むことを目的に、その名前「瑞友会」と相呼応しています。サブタイトルの「MEDIPOINT」は、「Medical」と「Port(港・空港)」をかけた造語。名市大を最新情報を発信する拠点とし、卒業生が社会・世界へ出発し、またいつでも戻ってこられる港であるようにとの願いをこめています。

## 連携病院

### 連携病院—地域医療を担う拠点・中核病院

#### 厚生連足助病院 — Q:病院の特色は?

「中山間地域での効率的な医療を目指して」—医療・保健・福祉の合体—

愛知県厚生連足助病院は、県東北部に位置する香嵐渓で有名な豊田市足助地区にあります。「安全・安心・満足の医療・福祉(介護)・保健活動を通じ、中山間部地域住民の生活を守り、自然と共生できる文化的地域作りに貢献する。」という理念を掲げ、「上流(中山間)地域の健全な維持なくして、下流(都市部)に住む人びとの安全はない」をスローガンに、中山間部地域におけるへき地医療拠点病院として、職員一丸となって地域医療に取り組んでいます。診療圏の高齢化率は35%以上ですが、年をとっても安心・満足して暮らせる地域づくりを目標に地域のセーフティネットとコミュニティの場を提供しています。ICT (Information and Communication Technology) が田舎を救うと信じ、医療だけでなく保健・介護・福祉との連携を推進しています。人々が「良医」を育ててくれるという風土がまだまだ残されているこの地域と一緒に仕事をする人をお待ちしています。

厚生連足助病院 院長 早川 富博



#### 菰野厚生病院 — Q:病院の特色は?

「名古屋市立大学の研修協力病院として」



当院は60年の歴史があり、四日市市に隣接する人口4万人の菰野町の基幹病院として、理念を「キラリと光る医療を提供し、愛され、信頼され、選ばれる病院を目指す」と定め、急性期から慢性期医療、健診、在宅福祉部門までの地域医療に包括的に対応しています。現在は、病床数230床、診療科は16科です。医療の質にこだわり、最先端の診断・治療機器[64列CT、1.5T MRI、アンギオ、ESWL等]を整備し、また回復期リハ病棟においては、北勢医療圏の中でも一番高機能となっています。また、名古屋市立大学、いなべ総合病院の研修協力病院となり、連携を図り良質な研修システムの構築に向けて鋭意努力しております。選択できる診療科(内科・外科・泌尿器科・眼科・放射線科)では、先端的な医療もっており、「地域医療」もバラエティに富んでいます。

菰野厚生病院 院長 岩井 昭彦

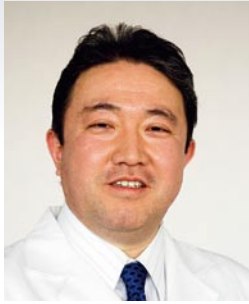
## 教育

### Center for Cancer Research設立によるがん教育研究高度化プロジェクト

#### 【文科省教育研究高度化のための支援体制整備事業】

景気対策、とくに雇用新生をめざした平成21年度補正予算の一部として教育研究高度化のための支援体制整備事業が、国公立大学を対象に募集され、名古屋市立大学でもタイトルにあるCenter for Cancer Research設立によるがん教育研究高度化というプロジェクトで応募した。日本全体で300億円、1プロジェクトあたり6億円という大型の事業で、名古屋市立大学のプロジェクトも6億円弱の規模で作成したものである。このたび文科省から内示があり間接経費1億2000万を含む5億円超に減額の上、採用されたということで、思いがけず多額の研究費がいただけることになり、まことに喜ばしい。このプロジェクトの申請に際しては、特に理事長が力をいれられて、プロジェクトの草案に手を加えていただいたし、私とともに文科省に事前交渉に出向くなどご尽力をいただいた。文科省のお役人も特に今回は新規雇用の創出に主眼があるので、我々のプロジェクトで30数人の採用が可能であるという点を評価しておられたようで、これが採用の大きなポイントになった印象がある。もっとも我々研究者としてはこの機会を最大限活用し、人件費もさることながら、備品や消耗品にも予算を配分した。これから実際に補助金が交付されたら、遅滞なく新しいポストに新規の人員を雇用しなくてはならない。研究費もそうなのだが、1億を超える人件費を本年度に執行しなくてはならない上に、来年の4月で基本的に打ち切られる補助金なので事務作業と、だれを雇用するか、というのが難題である。何とか皆様方のご協力によりスムーズなプロジェクトの実施をしたいと考えている。

文責:腫瘍・免疫外科学 教授 藤井 義敬



Atsushi Umemura

**梅村 淳**(うめむら あつし) 脳神経外科 准教授  
 専門:機能的脳神経外科

若い頃は主に脳血管障害の臨床・研究に従事していましたが、現在は機能的脳神経外科が専門です。米国でパーキンソン病に対する脳深部刺激療法(DBS)を習得して2003年より当院で実施しています。病歴が長くなった患者さんの多くが薬のみでは症状のコントロールが難しくなりDBSが適用されます。紹介患者さんは年々増加し、昨年度のDBS手術症例数はわが国で最多でした。パーキンソン病の治療は近年飛躍的に進歩していますが未解決な問題もまだ多く、今後もライフワークとして取り組んでいきたいと思っています。また、神経内科やリハビリテーション部とのチーム医療体制も確立され、共同で種々の臨床研究を行っています。この分野における名市大発のエビデンスを世界へ向けてどんどん発信したいと考えています。

近年の論文:J Neurosurg(in press), Parkinsonism Relat Disord 14:655-657 (2008),  
 機能的脳神経外科 47:119-122 (2008), 脳神経外科速報 19:16-25 (2009)



Ineko Kato

**加藤 稲子**(かとう いねこ) 新生児・小児医学 准教授  
 専門:小児科

乳幼児突然死症候群 (Sudden Infant Death Syndrome: SIDS)はそれまで健康と思われていた乳児が主に睡眠中に突然に死亡する原因不明の疾患で、日本では乳児死亡原因の第3位となっています。私たちはブリュッセル自由大学附属小児病院と共同でSIDSの病態と覚醒反応との関連を調べています。覚醒反応とは睡眠中に発生した何らかの異常に対して、それを回避するために中枢神経系で起こる反応です。SIDS症例ではこの覚醒反応が低下、特に大脳皮質での覚醒反応が低下していることがわかりました。そのために異常から回避できず死に至るのではないかと考えています。今後さらなる病態解明と予防法確立に向けて研究を進めていきたいと思っています。

近年の論文:Sleep 31:47-54 (2008), Sleep 29:785-90 (2006)



Masaki Hara

**原 眞咲**(はら まさき) 中央放射線部 准教授  
 専門:胸部画像診断

画像診断医として、CT、MRI、US、PETを用い様々な疾患の画像と病理所見との相関による診断能の向上、悪性腫瘍(特に肺癌、びまん性中皮腫、悪性縦隔腫瘍)の病期診断に関する臨床研究を研究テーマとしています。病院での診療では、中央放射線部の副部長として、多くの高額医療機器を安全かつ効率よく運用し、日々増加しつつある各種検査を少しでも迅速かつ大学病院として恥ずかしくない最新レベルで施行できるよう努力しています。個人的には、医学生、研修医、若手放射線科医に対する教育に最も関心を持っていますが、研究、臨床、教育3つの仕事をこなすには時間が足りないのが悩みの種です。

近年の論文:J Magn Reson Imaging 30:321-326 (2009), Radiology 251: 112-21 (2009),  
 Acta Radiol 50: 638-44 (2009), J Thorac Imaging 23: 114-120 (2008)



Tamao Yamamoto

**山本 珠生**(やまもと たまお) 薬理学 研究員  
 専門:産科婦人科

妊娠高血圧症候群は母体の高血圧を発症し、しばしば胎児発育不全をもきたす重篤な妊娠異常です。近年、社会問題となっている妊産婦死亡の主要原因の一つです。しかしながら、その病態は、いまだ明らかではありません。私たちは、その病態解明に取り組み、妊娠高血圧症候群における血管内皮機能の特性変化を明らかにし、血管内皮機能障害の改善効果のあるL-アルギニン・葉酸投与が発症予防・治療に有用と考えています。

本年より、薬理学教室(伊藤猛雄教授)において妊娠高血圧症候群動物モデルを用い、研究を行っています。

近年の論文:Hypertens Pregnancy (in press), Br J Pharmacol (in press), Am J Obstet Gynecol  
 192:558-563 (2005), Br J Pharmacol 146:534-542 (2005)

## 新任教授のご紹介

### 医療健康政策科学分野—大森 豊緑 特任教授

Q:今後の抱負をお願いします。

平成21年8月1日付で新たに設置された医療健康政策科学分野を担当させていただくことになりました。これまで厚生労働省、和歌山県、国立がんセンター、国立循環器病センター等において、医療・健康政策の企画立案、地域医療体制の整備、高度先駆的医療及び研究開発の推進などに携わってまいりました。我が国の医療はいま大きな転換期を迎えており、地域医療連携体制の構築や資質の高い医療人の養成が強く求められています。また、生涯を通じて健康で生きがいのある長寿社会づくりも重要な課題となっています。これまでの経験を本学における医学教育・研究・診療の充実発展に活かすとともに、名古屋市、愛知県と連携を図りながら、地域医療の確保及び住民の健康水準の向上に取り組んでまいりたいと思います。皆様のご指導・ご支援をよろしくお願い申し上げます。



大森 豊緑 特任教授

### 地域医療教育学分野—大原 弘隆 教授

Q:今後の抱負をお願いします。

平成21年10月1日付で地域医療教育学分野教授および総合内科部長を担当させていただくことになりました。どうぞよろしくお願い申し上げます。臨床研修医制度改革により、全人的な医療や、地域医療などに必要なプライマリ・ケアなどについても習得することが義務付けられました。総合内科では、患者さんの症状に耳を傾けた総合的診療を実践することにより、より高度で充実した研修・教育を研修医や学生の皆さんに提供していきたいと考えています。そのためには大学病院の各専門診療科ならびに関連協力教育病院の先生方のご協力が不可欠です。至らぬところが多いとは思いますが、精一杯努力していきますので、何卒ご指導、ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。



大原 弘隆 教授

### ウイルス学—田中 靖人 教授

Q:今後の抱負をお願いします。

平成21年10月1日付でウイルス学分野及び肝炎診療室、中央臨床検査部(兼務)を担当させて頂くことになりました。これまで、内科医として、主に肝炎患者の診療に当たると同時に、臨床検査専門医として中央臨床検査部の業務に携わって参りました。私の主要な研究テーマは、「肝細胞置換キメラマウスを用いた肝炎ウイルス感染モデルの確立とその応用」ですが、最近では肝炎ウイルス感染症においてゲノムワイド関連解析を実施しています。9月13日付で「C型慢性肝炎に対するインターフェロン治療効果を規定する遺伝的要因(SNPs)」を同定し、Nature Geneticsにオンライン掲載されました。現在、この成果を検証するために全国共同の多施設前向き研究が計画されており、私たちが担う役割は非常に重要であります。これまでの臨床経験を生かして基礎研究からトランスレーショナルリサーチを目指して、教育・研究・診療を通じて精一杯努力していきたいと思っています。今後ともご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。



田中 靖人 教授

## OB訪問

### 鈴木 龍雄 教授—信州大学大学院医学系研究科 加齢適応医科学系独立専攻 神経可塑性学分野 教授

Q:現在までの活動と今後についてお伺いします。

1995年10月に信州大学医学部神経可塑性分野に赴任して新分野を立ち上げ、現在まで14年にわたって信州大で研究を展開してきました。残すところ10年を切った今、今後の研究展開の模索も進み、後半の研究活動を軌道に乗せようという時期にあります。私はこれまで主に新規ないし機能未知のシナプスタンパク質の同定と解析に携わってきました。大学院生を教育しながらPSD(シナプス後肥厚部)にこだわり、個性ある研究を目指してきました。その間、大学は法人化の荒波により激変し、コンピュータをはじめとする科学技術の革新的進歩は医学も世の中もすっかり変えてしまいました。このような世の中の流れを見るにつけ、「己が何を残せるか」模索の日々です。激しい競争の中で、著しく高度化が進んだ研究に関することはある意味で戦いでもあります。今しばらく頑張ってみようと思っています。



鈴木 龍雄 教授

略歴:昭和54年名市大卒。昭和58年同大学院医学研究科修了(生化学第1講座)。昭和58年同生化学第一講座助手、平成1年講師、平成3年助教授を経て、平成7年信州大学医学部附属加齢適応研究センター神経可塑性分野教授。平成15年より現職。海外留学:米国 ロックフェラー大学、テキサス州立医科大学

### 学部学生生活

#### 第50回川澄祭を開催します! —11月6日～8日

テーマは「バトン」!—半世紀にわたる川澄祭のバトンを受け継ぎ、未来へつなぐ今年の実行委員にインタビュー



実行委員のメンバー。4年生が中心となって頑張ります。

11月6～8日に開催する医看合同学園祭、「川澄祭」は、今年で記念すべき第50回を迎えます。実行委員一同、この「50回」という記念すべき年にふさわしい盛大な学園祭にしようと日々努力を重ね、皆で充実した時間を共有しております。これまでに同窓会、先生方をはじめ多くの方々にご支援をいただいております。この場を借りてお礼を申し上げるとともに最後まで温かく見守っていただけますようお願いいたします。

今年のテーマは「バトン」、またサブテーマとして「つなげる人、心、50音のメッセージ」を掲げました。これは我々が第50回という節目の実行委員であることから、リレーのバトンのようにこれまでの半世紀にわたる川澄祭の歴史をしっかりと受けついで次につなげていくという想い、そして、バトンの持つ「人と人、想いと想いをつなぐ」というイメージから川澄祭も来場者の皆様と学生、そして医療などたくさんの人、想いを医学看護

学祭である川澄祭だからこそできるコンテンツによってつないでいく役目を果たしたい、そしてそこで生まれたつながりを感じていただきたいという想いを表現しています。

今年の川澄祭では、そのためのコンテンツとして毎年恒例の「模擬病院」はもちろん、「体験授業」や「医療講演会」、また、昨年より始めました川澄祭だけのオリジナリティあふれる「骨髄バンクチャリティイベント」「がん医療討論会」も引き続き行い、たくさんの医療系イベントを準備しております。また第50回を記念した特別企画、そして今年度の目玉として河村たかし名古屋市長をお招きして、西野仁雄理事長兼学長と学生を交えて座談会を企画しております。今後の名古屋市における医療、教育、市政、そして名古屋市立大学が果たしていく役割などたくさんのお話をさせていただく予定です。まだまだ書ききれないほどたくさんの企画を現在準備中です。詳しくは川澄祭HP (<http://www.kawasumisai.com/>) をご覧ください。これだけの特色あるコンテンツにあふれた医学看護学祭は他に類を見ないと自負しており、実行委員一同、全国一の医学看護学祭を目指して準備を進めています。

我々は将来医療に携わる学生という立場から今の医療に対して、そして地域の皆様に対して川澄祭という場で何ができるのか、どう貢献していくべきかを常々精一杯考えてまいりました。その答えを探求しながら全力で川澄祭に打ち込んできた学生のエネルギーや想像力が一つの答えとして今年の企画一つ一つに詰まっています。ぜひ皆様川澄祭に足を運んでいただいて学生のエネルギーを感じてください。そして皆様が川澄祭を通じてたくさんのつながりを生み、それを感じていただけたらと思います。



エコな川澄祭を目指します。模擬店で使用する食器のリサイクルを会場で行います。

実行委員長 M4 森 亮介

### クラブ活動紹介

#### 部活動紹介—第4回 オーケストラ部 創部54年!

オーケストラ部は、5月のサマーコンサート・12月の定期演奏会の年2回演奏会を行います。

毎回演奏会では、プロの指揮者の先生をお招きし、会場は愛知県芸術文化劇場のコンサートホール等をお借りして行っています。1回1回の演奏会は、私たちにとってとても貴重なものです。

現在の部員数は、様々な学部・他大学からの仲間をいれておよそ70名になります。それぞれの学部で忙しいにもかかわらず、みんなが1つになり演奏会が成功するよう日々練習を頑張っています。

最後になりますが、今年の12月25日(金)18:45から愛知県芸術文化劇場コンサートホールで第54回定期演奏会を行います。お時間がある方は、是非足をお運びください。

オーケストラ部 団長 M3 梶浦 貴裕



練習の様子。青春の汗が刻まれた山の畑キャンパス大ホール。

### 大学院生の紹介

#### 博士課程4年村上里奈さん(整形外科学)が 2009年度 皇太子明仁親王奨学生に選ばれました

このたび、2009年度 皇太子明仁親王奨学生に選出されハワイ大学に留学することになりました。この奨学金は、明仁親王(現在の天皇陛下)の御成婚とハワイご訪問を記念して、昭和35(1960)年、ハワイ在住の日系人やホノルル商工会議所、日本経団連などにより創設されたもので、日本とハワイの大学院生を毎年各2名、互いに派遣する事業を通じて、日米の相互関係、友好親善関係を推進することを目的とし、2年間、奨学金が支給されます。

ハワイ大学では医学部修士課程のBiomedical Science部門で、医学研究や医学教育の方法論を系統的に習得する予定です。留学において、資金は大きなハードルとなるものですが、今回、奨学金を得ることができ、光栄に思っております。

最後になりましたが、人手不足の中、留学に対してご理解・ご協力を頂きました大塚教授をはじめ、整形外科医局の皆様方に感謝いたします。

プロフィール:1998年 信州大学医学部卒業、1999年 名古屋市立大学医学部整形外科入局。関連病院勤務を経て、2006年 名古屋市立大学大学院医学研究科博士課程に入学、2010年修了予定。



村上 里奈さん

### 化学療法部 —安全・安心・安楽な化学療法—



写真の説明:  
前列左より、岸由香(看護師)森田真弓(がん化学療法認定看護師)  
上田龍三(顧問)小松弘和(部長)黒田純子(がん専門薬剤師)、  
後列左より、吉田達哉(医師)辻かおり(がん化学療法認定看護師)  
市原菜月(薬剤師)岩田雅史(研修学生)内田裕子(研修学生)  
近藤勝弘(がん薬物療法認定薬剤師)



平成19年4月、入院、外来における化学療法の安全な施行を目的とし、新たに化学療法部が設置され、同年5月より外来化学療法室(11床)の運営が開始されました。現在同室は顧問1名、科からの派遣当番医1名常駐の体制です。がん化学療法認定看護師2名、がん専門薬剤師1名が配置され、臨床研究医1名は腫瘍専門医を目指し各診療科のローテーションを開始しています。外来化学療法室でのモットーは「安全・安心・安楽な化学療法の実施」。月1回の化学療法部運営委員会を開催し、化学療法実施診療科の医師、看護師、薬剤師、医事課、システム課の参加のもと院内の化学療法に関わるすべての議案を協議しています。他に毎朝、患者情報共有のモーニングカンファレンス、週1回ウィークリーカンファレンスとして外来化学療法室の運営に関わる協議を行っています。また、月1回は表裏一体の関係にある緩和ケア症例検討会に合同参加しています。急変対応としては、当番医師の常駐を基本に診療科コール当番と救急部からのバックアップ体制により心強い体制を頂いています。また血管外漏出については皮膚科が全例を迅速対応してくださっています。抗がん剤レジメン管理については、小委員会として「抗がん剤等レジメン審査委員会」を組織し、集中的にレジメン管理を行い、登録レジメン数は現在488件、認証レジメンのみが病院で使用できるようにしています。外来化学療法室使用の全レジメンに対し各診療科専門医が「レジメン注意マニュアル」を作成し、外来化学療法室でおこりうる副作用、合併症についてその対応法を全診療科向けに提供、また平日10時までにオーダーされたすべてのレジメンは薬剤師が抗がん剤調製にあたっています(入院も緊急オーダーを除き薬剤師が抗がん剤調製を実施)。外来化学療法における臨床試験への試みとして、こころの医療センター、緩和ケアチームと連携し外来化学療法実施患者の適応障害の側面について、また乳腺内分泌外科は化学療法の副作用としての脱毛、末梢神経障害の予防に関わる臨床試験を実施中です。

化学療法同意書取得は100%実施化しており、治療のゴールを明らかにする方針の基に患者サイドに立った患者支援ができるように心懸けています。制吐対策、口腔ケアについては薬剤部と協力して対策マニュアルを作成し、口腔外科の協力のもとに歯科衛生士によるアセスメントを実施しています。

患者さんの快適性については、待ち時間の短縮を第一課題とし完全予約制とし、現在、平均25分の待ち時間を実現し、点滴中でも家族が全会計を終えられるように電子カルテシステムを工夫しています。全床でDVD/CD/TV/radioを無料で視聴でき、個別の消灯スイッチ、空気清浄機、BGM音響設備、外来化学療法室専用個室トイレを設置し、リラックスした空間を提供しています。外来化学療法室利用患者の体調不良時の連絡先は、電話窓口を設置し外来化学療法室で一括して受け入れ、患者さんの安心に寄与しています(1ヶ月約20件)。また専任主任薬剤師を中心に、外来化学療法室にて治療中の患者さんにベッドサイドでの薬剤指導を行い(月平均約80件)患者支援を進め、患者さん100例の満足度調査の結果では看護師、薬剤師からの指導は、5点満点で4.7点、4.4点という高い評価を得ています。外来化学療法室利用患者数は1日あたり18件、月約370件を数えています。飽和状態にあり、病床確保が課題となっています。なお入院の化学療法における診療科への支援としては、化学療法に伴う副作用・合併症への対応や難診断・難治療例の他職種間の合同カンファレンスの開催を行い、横断的ながん治療体制を始めています。当化学療法部はご紹介の通り、多くの部門のご協力とご活躍のもとに成り立っており改めて感謝申し上げます。そして当部門はやる気があり前向きなスタッフに恵まれているのが何よりの財産です。

文責:化学療法部 小松 弘和 部長

### 翼よ、あれが桜山の灯だ! —Dr. H リポート 2009—



- 1、ヘリポートのスペースは? :24x24mです。雨水の処理等の為に中心から東西に各1/75の勾配があります。アクセスはヘリの運航原則に基づき高確率の北西からの風にアゲインストに、東から進入し西へ離陸するルートの基本とします。
- 2、運用時間帯は? :原則として午前8時30分から午後5時(日没)ですが、災害等の緊急時の警察や消防のヘリは夜間に飛行することがあります。
- 3、ドクターヘリ(低騒音型)の騒音対策は? :ヘリポートで最大111dB、川澄キャンパス敷地内では平均約84dBです。院内では殆どエンジン音は聞こえません。
- 4、受け入れ実績は? :平成16年6月10日の受け入れ開始以来、平成20年までの約5年間でドクターヘリ12件、防災ヘリ19件です。当初の見込み(年間十数件)より少ないことは喜ばしいことと言えるでしょう。
- 5、ベストユーザーは? :受け入れ元(先)のトップは県立多治見病院です。最も多くこの場所を訪れたのは研修希望の医学生の見学者だという話もあります。

取材協力・資料提供:病院施設係 池田 英男様

### 地域貢献・地域活動

#### スーパーサイエンスハイスクール高大連携講座を行いました

#### 「脳の中を移動するニューロンをのぞいてみよう! ~GFPマウスを用いて~」

平成21年7月23-25日の3日間、分子医学研究所再生医学部門において、名古屋市立向陽高校の2年生4名と引率の先生1名を迎え「高大連携講座」を開催した。これは、文部科学省よりスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の認可を受けた向陽高校が、本学医学研究科と連携して行っている活動であり、将来の国際的な科学技術系人材の育成等を目標としている。本年度は、再生医学分野の教員(澤本・金子)と博士課程大学院生の澤田雅人と加古英介が、未解析であったGFPTランスジェニックマウスを用い、脳内を移動するニューロンの解析を指導した。生徒は非常に熱心に実験に取り組み、最後に得られた結果(我々も初めて見る新しいデータである!)を一人ずつ発表していただき、討論した。期間中に開催した第6回再生医学分野公開セミナーにも積極的に参加し、高校生からの鋭い質問に海外から招いた講師の先生も驚いている様子であった。純粋でひたむきな高校生との交流を通して、我々もサイエンスの面白さと魅力を再認識することができた。

文責:再生医学 教授 澤本 和延



#### あの頃桜山では(昭和34年9月 伊勢湾台風)

「俺はそれほどKYじゃあないぜ。」N先生の語りはこの季節の風物詩でもある。

昭和34年9月26日東海地方を直撃した伊勢湾台風は数多くの尊い命を奪うとともに、多くの桜山人の運命をも変えることになる昭和史に残る出来事だ。既成の報道の陰で、ささやかなエピソードがあった。その頃のこの界隈の画像記録が殆どないのは「この近辺は公務員の家庭が多く、当時はまだ高価なカメラが一般家庭に普及していなかったから。」という説があるが、おそらくそれどころではない状況があったからに違いない。「思いのほか雨よりも風が激しく、まだ雑木林だった密柑山や陽明学区の数少ない高台の家の屋根が吹き飛んだ。」と言う(M氏)。名市大では学生・医師を問わず犠牲者の収容に動員がかり、この件に関して最も多くの証言が得られる。「笠寺のすぐ先まで海が来ており、そこから網を担いでボートに乗った。まさに地獄絵。三途の川を渡っているのかと思った。」(S医師)。「土古競馬場付近でおびたしい数の亡骸を見た。」(M医師)など。壮絶な情景は想像を絶するものだったのであろう。当時瑞浪に派遣されていたO医師は「中央線の蒸気機関車が止まり数日間名古屋に近づくことすらできなかった。」と言う。そして冒頭のN先生は言う。「俺はお袋の腹の中で事の重大さを感じた。そしてその晩出てくるのを止めた。空気を読み、少し落ち着いたところで生まれてくることにしたんだ。多くの人の命を背負いながら。」爪痕大きい四日市で10月1日にこの世に生を受けた彼は、その後さらなる人生の暴風雨に曝されながら、産婦人科医として多くの生命の誕生に携わる。人間、まさにモチベーションは様々である。合掌。

(※KY:空気が読めていないの意)



写真は昭和34年名市大正門南大学事務局(瑞友会提供)

#### 桜山の懐かしのお店紹介—第5回「八百玉」さん

以前から前を通るたびに気にはなっていた「八百玉」で、この日誘われるがままに昼食をとることになった。

店内に足を踏み入れるとすぐに座敷がある。腰を落ち着けて年季の入った佇まいを一望しながら、出されたお茶をすすっていると、何だか和んできた。定食のシステムが他とは少し違い、いくつかあるおかずや丼物を組み合わせて選ぶことができる。月曜日には鰻も定食のメニューに挙がるらしい。僕は注文したフライとハモ丼を口に運びながら、今度は鰻を食べに来よう、と心に決めたのだった。

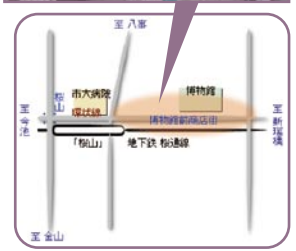
医学部の先生方も何名かお見かけした。昔からあるランチのお店として、どうやら定番であるらしい。

(M5 学生)

雰囲気のある店内。上の階では宴会もできます。



旬のサンマがおいしそうです。月曜日の鰻も気になります。

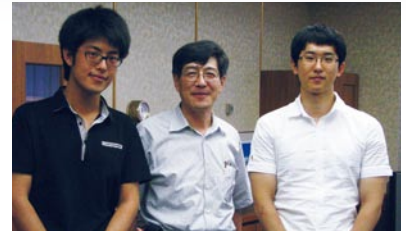


(MAP)

## 韓国ハルリム大学から留学生がやってきました (7/13~8/7)

本学との学生交流の一環として、2名の学生が研修。今回が人生初の海外での滞在という彼らに4週間の感想を伺いました。

As I want to be an ophthalmologist in a future, I chose to study at the department of Ophthalmology and Visual science for four weeks. On the first day, Dr. Nozaki told me that she would give me a chance to do cataract surgery on pig eyes two weeks later. I was so excited, because in Korea, we, students only see the surgery but never do the operations ourselves. After a few days, Dr. Nozaki gave me an opportunity to assist her surgery. As this was my first time to assist with ophthalmology surgery, I hardly knew what to do and only watched the operation through a microscope until the surgery was finished. After this experience, before someone told me to, I asked the doctor if I could scrub to assist with the surgery, and talked to patient in my poor Japanese to do so. The more I worked as an assistant, the more confidence and sense of achievement I gained. And finally I could feel I was a member of the ophthalmology department at Nagoya City University. I challenged myself to do clinical practice in Japan and I ended up having confidence and belief in myself. This experience will help me to choose the right path and help me to make decisions about my future as a doctor. Thank you, all of doctors at department of ophthalmology of Nagoya City University for your precious teaching.



白井研究科長と。左がKim Donghyunさん(6年生:研修先 眼科)、右がBae Kunhyungさん(5年生:研修先 外科等)。

Kim Donghyun (キムドンヒョン)

私は将来眼科医になりたいので、研修も視覚科学を選択しました。研修初日、教官の野崎先生が、2週間後に豚の目の白内障手術をさせてくれるとおっしゃいました。韓国では、学生は先生の手術を見学するだけですから、本当に嬉しかったです。数日後、野崎先生の手術のアシスタントをさせてもらえることになりました。しかし眼科の手術は初めてだったので、どうしたらよいか分からず手術の間ずっと顕微鏡をのぞきこんでいました。このことがあった後、私は誰かに言われる前に「手術のアシスタントをさせてもらっても良いですか。」と先生に聞くようにし、患者さんにも拙い日本語で確認していました。アシスタントをする度に、自信と達成感が増し、そして最後には名市大病院の視覚科学のメンバーになれたような気がしました。日本での研修は私にとって本当にチャレンジでしたが、最後は自分の力を信じる自信ができました。この経験はこの先、私の人生を正しく導く手助けとなり、医者としての将来を決める上で、とても役立つことでしょう。視覚科学の先生方、本当にありがとうございました。

It was my honor to study at Nagoya City University Hospital for four weeks. Honestly speaking, when I heard that I was selected as one of exchange programme students for Nagoya City University, although I was very pleased to hear that, I was really nervous, because this was my first time to study abroad. But after all, I was truly satisfied with staying here, not only at Nagoya City Hospital but also in Japan. Although I have learnt a lot of medical knowledge here, I think what is most important is that I met so many good friends and doctors, and most of all, I could experience real life in Japan. As a student of Hallym University, I want to express my deepest appreciation to you for giving me this wonderful opportunity. Unfortunately, it is time to say good-bye. But I don't want to say "good-bye" so will say "see you again". I will wait for students of Nagoya City University to come to study at our university hospital. Until then, see you.

Bae Kunhyung (ペクンヒョン)



ハルリム大学はソウルの北東80キロの春川(チュンチョン)市にあり、7学部を擁する総合大学。本学とは、平成18年に学術交流に関する覚書を交わした。これを機に両大学の交流が活発になることを期待します!

この4週間、名市大病院で研修できたことをとても誇りに思っています。正直言うと、交換留学生として選ばれた時には嬉しかった反面、初めての海外留学ということで不安もありました。でも今は、名古屋市立大学での研修も、日本での生活もとても満足しています。私はここで本当に多くの医学の知識を身につけることができました。でも一番大切なことは、多くの素晴らしい友人や先生方に出会うことができ、さらには本当の日本というものを体験できたことです。ハルリム大学の学生として、大変感謝しています。残念なことにもうお別れを言う時が来てしまいましたが、お別れは言いたくないので、「また会いましょう」と言うことにします。今度は名古屋市立大学の学生が私たちの大学病院に学びに来てくれるのを待っています。それではまた、その時お会いしましょう。

## 川久保己代子様に感謝状を贈呈しました



7月8日(水)院長室にて、医学部に多大なご支援を頂いた川久保己代子様へ、白井研究科長、尾崎事務局長立会いの下、西野理事長より感謝状を贈呈しました。川久保様への感謝状贈呈は今回で二度目となります。川久保様の医学部に対する並々ならぬご理解により、基礎教育棟の改修工事が施工されたことや、MD-PhDコース等の学生奨学金制度(川久保基金)の創設につきましては、既にこの誌面上でもご紹介したとおりです。川久保様のご主人は、生前は内科医として社会に貢献されておられました。また、ご自身が本学部附属病院での入院中には、一所懸命に実習に励んでいる学生たちから元気を買ったとのことでした。そこで、医療、とりわけ医師を目指して頑張っている学生に何か役に立てることがあればと、惜しみないご協力を申し出てくださいました。川久保様の温かいお気持ちに対して改めて感謝申し上げます。



## ひとつこと☆メッセージ募集!

本誌では、皆様からの一言メッセージを募集します!ご無沙汰している同級生に、恩師に・・・ワイワイ楽しいお便りお待ちしています。ほっと和む「名市大人のつぶやきコーナー」をみなさんと作りたいと思います。

例えばこんな一言を、

研究者紹介に載った同期・先輩へ。「おまえも、がんばってるみたいやん。」  
ごぶさたしている同窓生への近況を。「最近、腹が出てきました。」  
新米医師のつぶやき、女性医師必見!ウチの家事両立法!「ここが手抜きポイント!」  
などなど、必要事項を記入の上、葉書かe-mailで下記までお送りください。(注:次回掲載は2月号です)

1.一言メッセージ(30字以内) 2.卒業年度 3.お名前(ふりがな) \*匿名希望またはペンネームでの掲載をご希望の場合はその旨をお書きください。\*4.住所 5.電話番号またはE-mailアドレス

《受付》〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1 E-mail:igakujimu@sec.nagoya-cu.ac.jp  
名古屋市立大学医学部広報誌「一言メッセージ」係宛

\*お送りいただいた個人情報については、お便りの採用に関する応募者への問い合わせ、確認以外の目的で使用いたしません\*

広報誌：瑞 医(ずい)

発行：名古屋市立大学大学院医学研究科・医学部  
〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1  
TEL (052) 853-8077 FAX (052) 842-0863

URL <http://www.nagoya-cu.ac.jp>

※次号の発行は平成22年2月下旬発行予定です。[年3回 2月・6月・10月]

我こそは  
通信員!

広報誌「瑞 医」へ最新の話題をお届けして下さるサポーター大募集!「今、当講座ではこんな若手が頑張っています!」など広報委員会へ取り上げてほしい話題を教えてください。教職員・学生、身分は問いません。我こそは、という方は、[igakujimu@sec.nagoya-cu.ac.jp](mailto:igakujimu@sec.nagoya-cu.ac.jp)  
または医学部事務局 広報担当まで